



災間社会を共に生きる 開催報告



日時：2024年8月25日（日）15:00～17:00 *Zoomによるオンライン開催

第1部 講演「グローバル社会のコミュニティ防災～災害からの気づきとその後の活動を振り返る～」講師：吉富志津代氏

第2部 吉富氏と宮本匠氏による対談「これからのコミュニティ防災」（申込者：20名）

今年度の「あしたば勉強会」では、武庫川女子大学国際センター長で教授の吉富志津代先生を講師としてお迎えし、外国人住民を含めたコミュニティで防災に取り組むことについて参加者の皆さまとともに考えました。吉富先生は、阪神・淡路大震災後に外国人救援ネットやコミュニティFMの設立に参加し、現在は多言語環境の促進、外国ルーツの子どもの教育、外国人自助組織の自立などの活動と研究に従事されています。

勉強会は2部構成で、第1部のご講演では、阪神・淡路大震災後に始まったコミュニティFM ラジオ局わいわいの設立当時のお話をいただきました。ラジオでは、韓国語やベトナム語といった多言語での放送がされていたとのこと。現在のように「多文化共生」という言葉が一般に知られていなかった30年前に、多言語放送がされていたことに大変驚きました。それだけでなく、被災地を回って、どのような情報提供が必要かを聞きながら、翌日の放送につなげていたそうです。また、当時は被災して初めて、外国ではゴミ出しのルールがないということを知り、相互理解や共感が始まったところもあったそうです。そういったご経験から、外国人を含めた多様な人たちが「住民自治」の意識を持ち、住民間のつながりを普段から作っておくことの重要性を訴えられました。近年、留学生や技能実習生といった在留外国人は増え続けていますが、家と学校・職場の往復ばかりで、近隣住民とほとんど関わりを持たない人々も多くいます。そういった人たちが日本人住民と有事の際に助け合うためには、やはり普段から顔見知りになり、お互いを理解し合っておくべきなのだ改めて感じさせられました。

第2部では、吉富先生と、新潟県中越地震での支援活動をきっかけに災害復興について研究されている大阪大学人間科学研究科の宮本匠先生との対談が行われました。対談では、能登半島地震での支援活動が話題に上がりました。30年前の震災に比べて、災害に対する意識やボランティア意識が高まった一方で、マニュアルができすぎて規制が敷かれてしまったといいます。個人の物資が受け付けられなかったり、ボランティアも県によって管理されるあまり希望する方全員を受け入れられなかったりしたそうです。マニュアル化することでももちろん改善されている面もあるが、阪神・淡路大震災の時の方が自分たちで考えて自由に行動を起こせたとおっしゃっていました。こういった問題提起は、今後の被災地支援に重要な示唆を与えるのではないかと感じました。

勉強会終了後のアンケートによると、講演、対談ともに皆さんに満足していただけただようで、「大



変勉強になった」「これからについて考える事ができた」等のお声も寄せられました。皆様の明日を考える勉強会になったのではないかと実感しております。

改めてご講演くださった吉富志津代先生と、対談をしてくださった宮本匠先生、参加者の皆様方にお礼を申し上げます。（文責：佐々木）